

(1) いわゆる大衆の心

甲「僕なんか、仏教などつまらないものだと思う。もうこの頃の若い者で仏教などに興味を持つているような者はない。あんなものは時代と共にすたるものだね。」

乙「そうか、どうして仏教などつまらないものかね。」

甲「それは、大衆の心をひきつけてゆく何ものもないからさ。死にかかった、爺婆じじばばより外に、心から信じている者はないじゃないか。」

乙「なるほど、それでは問うが、大衆の心といふやつは、何に一番引きつけられているかね。」

甲「先日、僕は石井漠の舞踊があつたが、大変な人気だつたね。しかも入場料二等だつて一円さ。仏教なんて、どんな大家が来たつて一円はおろか二十銭の入場料だつて入りやしないよ。」

乙「なるほど、そうすると大衆の心は石井漠とか石井小浪とかの舞踊にひきつけられているわけかね。」

甲「それだけじゃない、この間、ある劇場へ、入江たか子、あの映画女優だ、あれが来たがね、そりやく／＼大変な人気だ、あの大きな劇場へ押すなく／＼のさわぎだ。」

乙「なるほど、そんな所へは高い料金を払つて押すなく／＼のさわぎ、仏教だとくると、一銭や二銭のお賽銭をとつても、搾取／＼と言われるのだね。ところで君に問うが、石井漠の舞踊を見て、君は何を得たかね。」

甲「それは、その、彼の芸術の高いのに僕は酔うたね。」

乙「それで、君、何を得たかね。」

甲「それは、その、僕の芸術の……眼を開いてくれたね。」

乙「それで君は、漠のように踊れるかね。」

甲「君は少しも芸術に対する理解などないじゃないか。僕に踊れるものか。」

乙「そうか、一体、漠は一晚にどれだけでもらうのだ。」

甲「僕はよく知らんが、何百円だろうね。」

乙「すると、君よりもよいことをしたのは漠だね。君の手許には何も残っていないじゃないか。入江たか子の場合だつて、君の手に、そう大したものには残つてはいない。日本で一だとか、二だとか言われる、声楽家、藤原義江とか、関屋とし子とかの歌うたいの上手な連中は、一晚に一声千両と言われるが、あの連中は、日本へ帰つてお金を作つては、すぐ外国に逃げる、金がなくなるとやつて来る。長い間日本にいたのでは人氣が落ちる。そこで何度でも、新婦朝／＼とやるんだそうだが、大衆は損なものに心をひきつけられているわけだ。あの連中も、君のいわゆる、大衆の人氣をひきつけているものだろうね。」

甲「もちろんだ！」

乙「そこで俺は君にはつきりという。大衆の心をひきつけていない所に仏教家の悪かった所もあるが、大衆の心をひきつけていないから仏教がつまらないといふことはちつともならないことをだ。」

甲「なぜだ。」

乙「君、今頃はやりのレビューといふ奴だね、女がほとんど半裸体になって踊るやつだ。あれを、口あんぐりあけて見ている心、あれは、踊っている者は芸術かしらんが見ている連中は、全くのいわゆる無意味じゃないのか。あのナンセンスな心をひきつけるもの、そんなものは、仏教には持ち合わせがないさ。言いかえるともつと人生を真剣に考えよう、社会や、人生、国家、さらにその根本に自己の本来に生きる道を切り開いて行かうというのが仏教なのだからね、お釈迦様の出発が、レビューや石井小浪の艶な姿に見とれているのは、別の所から生れたものなのだよ。」

俺もこの間、ある方に案内されて、一流の演芸館？に、漫才、落語、等々を聞きに行つた。はじめ三十分ばかりはおかしくて笑いもしたが、後は馬鹿くさくて帰る路には物足りない淋しさと、疲れとが残っていた。君だつてそうじゃないか、漠の舞踊を一回出して見て帰る時に、心の底からの満足、あるいは一生の記念塔になるような感動が残っていたかね。」

甲「そういえばそうだね。一生に一度は有名なやつだから見ておこうと思つた位のことだよ、本当を言えば。」

乙「そうすると、仏教などへ来ないようになったのは、仏教がいけないのか、大衆の心の動きをどうにかせねばならぬのか、わかつただろう。」

甲「それじゃ、いつたい仏教の眼目は何といふのだえ。」

乙「それなら語ろう。」

## (2)無我思想

甲「仏教のいつたい眼目は何であるか。」

乙「八万四千の法門と言ひ、一万巻の経典と言ひ、なかなか大部のものであつて、一口に言えと言へば困るが、しかし、仏教を一番よく代表するものは『無我』の思想信念であろう。」

甲「無我といへば、どういうことだ。」

乙「無我の思想は、仏教独特のものであつて、人間の一番正しい生活態度を現わされた言葉である。無我に対する言葉は『我』であるが、我とは、我慢とか我執といへばよくわかる。」

甲「無我といへば、我、無しということじゃないか。」

乙「そう……：それも言える。しかし、我無しと言つても、おたがいがここで話しているのだからね。無いことはない。」

甲「それじゃ一体どういふことだ。」

乙「世には、我々に靈魂といふものがあるかないか、といふことを問題にして、ある者は万年万代、太りも変わりもしない靈魂といふものがあると信じているし、そうで

ない者は、死んだら人間は消えてなくなると考えている。釈尊は、初めの方を有の見、終りの方を無の見と言つて、どちらも迷えるものの考えであることを説かれたのだ。」

甲「それでは、靈魂などといふものはないのか。」

乙「もちろん、常一主宰と言つて、永久不変の靈魂、即ち我といふものはないのだ。」  
甲「そうか、それは初耳だ。しかしなかなかわかつたことを説くものだね。ところが、仏教信者でも魂々と何時も言っているじゃないか。あれはどうしたことだ。」

乙「言葉といふものは色々な意味に使はれるので、あれは、流布語と言つて常識的に使っている言葉で『ごころ』といふよりも、性根しょうねだまとか、根性魂こんじょうだまとか「たましい」とか言えば強く響くから使っているのだ。例を取つて言えば「お日様が、東から出た」と言つても、「そうじゃない、地球が廻つたのだ」と一言ひ張り手がないのと同じだ。」

甲「なるほどわかつた。そこで、無我についてもつと聞かしてほしい。」

乙「靈魂がないといふと、『それ見ろ、人間も物質なのだ、焼いたら灰になる、脳細胞の活動が精神と言われるので、物質の一種の働きなのだよ。』とこんな簡単に言つてのける。これも誤りだ。」

甲「そうするといよいよむづかしいではないか。有るんでもない、無いんでもないというように聞えるのだが。」

乙「有ると言つたつて、君の三つ兒の時は、ありやしないじゃないか。ないと言つたつて、二十五の青年が笑っているじゃないか。だから、あるんでもない、ないんでもないと言つているのじゃない。どうきめても偽だ。」

甲「それを無我といふのか。」

乙「そうだ、一切合切、天地間、ありとしあるものはすべて無我だ。だから、動かないものとしてなく、変わらないものとしてない、この相を諸法無我といふのだ。」

甲「諸行無常といふのは、このことであるか。」

乙「そうだ、諸行無常だ。行といふ字は『もの』という意味だが、物も者もものだ、こころにあるすべての物も、君も僕もすべて無常だ。有といふ考えをたたきこわし、無といふ考えを打ち砕くと、そこにほんとのものの相がある。それを『空』ともいうのだ。一切は空だ、即ち一切皆空だ。」

甲「だんだんむづかしくなるね。空といふのは、有と無とを出したことか。」

乙「そうだ。この吸つてる煙草も、月も日も、我も人も、このままで空なのだ。ところがそれがおたがい凡夫には、頭でわかつて、本当にわからないのだ。」

甲「なぜだろう。」

乙「それが即ち、お互の心の中に、とても根強い『我』がはびこっているのだ。この『我』といふやつが、発展してあらゆる悪を造りはじめなのだ。我ありと執着するか、俺は俺、貴様は貴様、となつてそこに我利我利の根性が出て、自分だけが、何もかも長い方を握つて、九百九十九人をおとしても、自分一人が浮ぼうとして、大衆が困つても、自分だけが地位や富や幸福にかじりついて、離れない。嫌な社会が生れて来るのだ。」

だから、その我が人間にある間、大小の喧嘩はやまないのだ。この私の始末をつけることが生きることの根本だ。」

### (3) 青年よ哲人となれ

#### 全身これ耳

甲「仏教の中心思想が『無我』であって、人間社会は無我でなくちゃならぬことは、わかったが、無我ということがわかりさえすればいいのか。」

乙「さ、そこからが問題だ。仏教は、哲学であると共に宗教だ。宇宙はこう、人生は、人間は、と理論づけてゆくことだけでなく、哲学を覚えたり、知ったりすることだけでは『淋しき甲虫』になることだ。我らになくてならぬことは『哲学する』ということだ。でないで、「仏教は無我だ、無我主義に生きねばならぬ」と叫びつつ、誰よりも一番我が強いというような悲惨がおこる。」

甲「哲学するとは、どういうことだ。」

乙「自分の頭だけで知ってゆくと必ず知ったことが我慢の種になる。昔ギリシャにおいて、ソクラテス及びその弟子は、『汝自身を知れ』と叫び、『無智なる我』と知っていた。けれども、ソフィストの連中は物知りだった。哀れなる物知りだった。そこで、哲学を覚えた人になつてはならない。哲学する人に、即ち哲人にならねばならない。哲人は決して頭だけで真理を聞かない。頭も、胸も、腹も、自分の全体をもつて法を聞く、全身を耳にして真理を求める。」

#### 学んで大愚に至れ

甲「全身これ耳になれとはいいいことを聞いた。」

乙「人間の眼は星を見ることが出来る。しかし足は大地についている。高い理想を持たねばならぬと共に、現実の自己を忘れてはならない。自分の足が大地についていることを忘れて、人の足が大地についていることを笑うような滑稽をくり返す。」

甲「何だか、僕がまな板の上にあげられているような気がする。」

乙「我々が願求している生活態度は、批判の眼を有すると共に、実践者になりたいことだ。」

岡山県では、現職の警官が銀行の支店長を殺した、あのギャンブル事件を考えて見ても、国家の法律によつて人を治める前に、自分こそ、法の実践者でなければならぬ。警官であるより前に法を実践する国民でなければならぬ。

人の絵を見て批判することは出来る。しかし絵筆を持たせると何にも描けない。そこで真の哲人は、頭だけが進んで手や足は萎縮して動けない、というような不具者になることを一番嫌う。

我らは知ると共に実践しようとする。哲学者や、物知りであるより先に、人間でなければならぬ。」

甲「一一もつともだ。」

乙「教育家が教えることを知って、習うことを知らない。宗教家が説くことを知って、聞くことを知らないでは、真の教育家でも、宗教家でもない。」

哲人は、終生、先生であるよりも学生でありたいと願う。

仏教が真実の菩薩は、常に仏法僧の三宝の前に合掌していることを説くのもそれである。

君よ。いよいよ学べ。学んで大愚に至れ。」

甲「聞いていると内省せざるを得ない。無我についてもっと聞かして頂きたい。」乙「無我というのは『我が無い』というような平面的なことではない。無我を体感せねばならないのだ。」

甲「つまり、無我思想を知っただけでは駄目だというのか。」

乙「古来の仏法者は、みんな、この無我を体験するために、血みどろな求道精進を続けた。ここが仏教が、哲学者をつくるのでなくて、哲人を生み出そうとするゆえんだ、哲学であると共に宗教であるゆえんだ。」

親鸞聖人にしても九歳から二十九歳まで勉強されたのだから、大概なことはわかっただけに達しない。しかるに、全身をもつて聞かれ、求められる時に、そこに出て来るものは何であるか。無我になつてくれない自己、法の示すが如くなつてくれない我、それがますますはつきりして来る。そうした悲痛な努力を聖道門というのであるが、人間は誰でも、本能的な動物的なものであると共に、同時に、自己の改造によって、自己を高めようとする聖道門なのである。聖道門でなければならぬ。しかしその自覚反省の極、生命道の一大転換が行われた。それは真如と我との問題だ。」

#### (4) 青年よ生活者となれ

##### 真如

甲「真如とは何のことか。」

乙「真如とは天地森羅万象の能産者である。」うみのおや

甲「仏教でも天地万有の親を立てるのか。」すべてのも

乙「そうだ。法性法身仏と言つて、色もなく、香もなく、形もなく、東西南北の空間でもなく、過去、未来、現在でもなく、あらゆる一切を越えた絶対が、真如である。その真如以外には何ものもないのだ。」

甲「それではキリスト教の天地創造神と同じであるか。」

乙「それとはちがう。釈尊は、天地創造神を否定した。真如は外的に一切を支配するのではなくて、万有の内にあつて、万有を生かしているのだ。即ち親は子(森羅万象)の中に生きている。これを内在というのだ。」

甲「それでは生命と言つてもいいのか。」

乙「そうだ。大生命だ。大生命だと言つても、物質に対する精神と言つたようなものではなくて、物心の以前のもの、即ち心色不二の根源である。この生命だけは、未来

永劫、人間の眼にも触れねば、耳にも聞えねば、思っても見られず、口にもかけられぬ、いわゆる言亡慮絶、一切を超越して、しかも一切に内在する、絶対真理である。」  
甲「なるほど、それならうなずかれる。だが、それだけわかったのでは、何だかもの足りない。」

### 生死界

乙「もちろんのことだ。そこで話を交えるが、我らは我らの現実に帰ろう。現実の人生を凝視しよう。このままでいいか。」

甲「このままではいけない。」

乙「同じ親から生れた子が、たがいに戦いつつ、傷つけつつ、我を出しあつて、早い話が、家庭の中だつてなかなか楽にはゆかない。何か問題をおこしつつ、いわゆる十悪五逆をくり返して、血みどろけの歩みを続けている。」

甲「そうだ。家庭の問題だけでもうんざりするね。僕の家でも全く行きづまりだ。」

乙「草木や自然の風景などは、あのままで天地の相に生きているが、人間はそれではおさまらない。人間は犬猫よりも食欲であるから、労資問題だとか、経済問題だとか、色んな問題をおこすのだ。しよせん、我らの人生は生死の苦海だ。いわゆる生死界である。生れては死に、死んでは生れ、その間、道をも思わず、法をも考えず、善というも無明であり、悪というも無明である。たがいに善悪を裁きつつ、苦しみつつ、苦しませつつ、全く無価値なる争いに、しかも一寸の身動きすら出来ない行きづまりの中に、苦だけはどうにかしようと思つてゐる。」

甲「全くその通りだ。実は僕も色んな問題で行づまっているのだ。」

乙「この生死界にいる者は、いかに迷いの流転でも、決して迷いとは思はない。悪いよいよ深くして、なお善人らしく、悪いよいよ甚しくて、ついに愚を知らず、唯、自ら高く人を見下げて、自分一人の幸福を考えているもの、即ち凡夫である。」

甲「僕がまず一番の凡夫だね。だが僕の所の妻などもヒスをおこした時など、手がつけられないほどの悪人凡夫だね。しかもそうした時は癩にさわるほど高慢だ。」

乙「仏は一切の苦悩は煩惱より生れると説く。即ち、苦は、ものに執着し、我に執着して、所有しようとする愛欲煩惱より生れるのだ。それらの生死煩惱のどん底には、無明とて、愚痴、疑惑、はからいのおそるべき我がひそんでいる。この根本無明を打ち破らなければ、明るく、正しく、生活することは出来ない。」

### 如来

甲「しからば何がその根本の無明を打破るのか」

乙「それは智慧である。」

甲「智慧？」

乙「そうだ、信心の智慧だ。聖人は智慧の念仏と言ひ、信心の智慧と言われた。」

甲「その智慧はどうして得られるのか。」

乙「それは、如来を念ずることによつて得られる。」

甲「如来とは何のことだ。」

乙「真如より顕現して衆生の上に来生するもの、如より来生するから如来だ。」

甲「なるほど、それでは無明生死の苦海へ、如より来生して、衆生を救おうとするのだね。」

乙「そうだ。真如法性のままが、生死苦悩の上に力となって顕現するのだ。その力としての仏を阿弥陀仏というのだ。尽十方無碍光如来だ。無量寿如来だ。そしてこの因果態して現はれた仏の力を本願力というのだ。この本願力が我らの現実に働きかけて、信心の智慧を發起せしめるのだ。」

甲「ちよつと待ってくれ。真如まではすぐわかったし、生死界も肯けるが、その阿弥陀仏がわからない。」

乙「よしわかるまで話そう。」

(5) 弥陀とは何ぞや

阿弥陀とは

甲「阿弥陀仏とはどんなものだ。」

乙「阿弥陀とは、無量寿、無量光の覚者ということだ。」

甲「釈尊とどういう関係があるのか。」

乙「釈尊を離れて阿弥陀仏があるのではない。しかし、釈尊は阿弥陀仏ではない。」

甲「それはまたどういう意味か。」

乙「弥陀は釈尊を釈尊たらしめたものだ。それは同時に、親鸞を親鸞たらしめたものだ。二にして一、一にして二。」

甲「それなら釈尊だけでいいじゃないか。」

乙「そこだ。釈尊は華嚴、涅槃、法華等のいわゆる聖道門の經典では、釈迦牟尼仏は久遠実成の仏であつて生滅を超えた仏である、地上で正覚を得たのではなく、古に正覚を成就して生もなく死もないことを説いている。即ち地上八十歳の寿命の釈迦でなくて、その背後にあつて永久不滅のものを釈迦牟尼仏と言つておるのである。」

甲「なるほど。」

乙「しかるに、大無量寿経では、無量寿仏は、我ならぬものとして説かれ、釈尊自身が、仏仏相念とて阿弥陀仏を念じていられる。即ち、いわゆる弥陀三昧に入つて、弥陀を説かれたのである。我らはこの大経において、釈迦の上に弥陀を仰ぎ、弥陀のうちに釈迦を見出すのである。即ち、弥陀は釈迦を釈迦たらしめた久遠の本地であり、釈迦は弥陀の現実への応現である。」

だから釈迦をはなれて弥陀はなく、弥陀をはなれて釈迦はない。二仏は全く一体である。」

教主と救主

甲「それでは釈迦は用事はないのか。」

乙「そうではない。親鸞聖人は、釈迦の古に帰つて、釈迦を真似、釈迦を追い、釈迦時代を再び実現することを断念して、永遠に現前する弥陀に帰したのである。」

甲「待つてくれ、弥陀は永遠に現前するとは何のことか。」

乙「釈尊は二千五百年昔の仏です。地上から去った。しかし、釈尊の上に現れた弥陀は永遠に滅びないで、常に一切衆生の上に、今、呼びかけているのだ。その永遠に今の仏だから、現前すると言ったのだ。」

甲「なるほど、散った花を追わないで、今の花の上に生きていく力に帰られたのか。」  
乙「そうだ。」

甲「それなら、ますます釈尊には用事はないではないか。」

乙「しかし、釈尊がなければ、その弥陀に生き、弥陀を説いて下さる人がない。すなわち、教主善知識がないのではないか。確かに、釈尊は救ってはくれない。救主ではないが、善知識がないならば、仏と人との交渉を知ることが出来ない。」

甲「それはそうだ。」

乙「法は必ず善知識が説き、その教法が弥陀を信ぜしめるのだ。すなわち、善知識が仏に帰命しつつ、仏の願意を説くのだ。仏教が仏法僧の三宝に絶対帰依を求めるのも、それがためである。仏（弥陀）をはなれて法もなく、僧（善知識）もない。三はそのままだ。善知識の教法が、絶対の権威として受けられる時、仏の願意にふれるのである。」

甲「何時のほどにか、仏、法、僧と三つになったが、大分よくわかって来た。」

乙「多くの人は、仏だけを抽象的に知ろうとする、それは、春の気候も、梅の花もぬきにして、春だけを見ようとするのと同じである。仏、法、僧の三つがそろつての、仏であり、法であり、僧である。」

甲「それに弥陀仏が信じられないのは、どうしたことなのか。」

乙「それは、邪見や、我慢や、疑いが、邪魔をしているのだ。」

甲「どうしたら、それがとれるのか。」

乙「そこだ、そこに善知識がいて、育ててくれるのだ。南無弥陀仏の聖なるみ旨を聞いていると、段々に、転廻して、ついに如来の本願力に救われるのだ。」

甲「俺はとて、駄目だ。」

乙「何が駄目か。」

甲「こんなに聞いているのに、信じられないのだから。」

乙「ほんとうに聞きたいのか。」

甲「そうだ。俺は聞きたくてたまらない。だんだん心が暗くなるようだ。俺は、如来はないとは言へなくなつた。それなのに信じてくれない。如来を信ずるにしては、あまりに俺の過去は暗かつた。でたらめであつた。」

乙「よし！　そこまで、わかれば、そして求める心があれば、必ず如来の救いは信じられる。」

甲「話してくれ。」

## (6) 生きる情熱

その夢が怪物だ



乙「君は今、俺の過去はあまりに暗かったと言った。」

甲「そうだ、俺の過去は少くとも考えて歩んだ過去ではなかった。静かに話を聞きつつ、俺を分析して見ると、四分の自暴自棄と、四分の享楽気分と、二分の憬れの夢とでしかなかった。そしてその全体が幽霊で、横着で、真実らしい何もものもなかった。」

乙「それでいて心の中には何か求めているのだ。」

甲「淋しいんだね。それにどうすればいいかわからないのだ。十八九歳頃のような、青雲の志、てなものが俺から消えてから後は。」

乙「青雲の志なんて妙な心だ。遙かな霞の中に描いている自分だ。」

甲「僕は小学校ではよく出来たし、皆がおだてたんだ。英雄主義で。ところが人生の現実俺にとつての宿命だった。貧しい家庭、父の病い、多くの弟妹、借金、そうした中へ引きずり込まれると、夢はだんだんこわされて行つた。夢がこわれると共に自暴自棄が芽を出しはじめたのだ。」

乙「よくわかる。だが人生の考え方が間違っている。」

甲「どこだ。」

乙「多くの若人が植えつけられ、更に、成功とか出世とかの名義で拍車をかけられて描き出す夢だ。あの夢が怪物だ。何が故に人間は有名にならなければならぬのだ。有名になつて社会の表面で躍らなければならぬのだ。そして、それが出来なければ、君のように悲観し、自暴自棄になる。それこそ間違いの中の大間違いだ。親鸞聖人を見よ。その時代の人すら知らないほど、人生に隠遁したではないか。そんなつまらぬものを追うた一生は、たとえ、高位高官になつたところで、人生の本質にふれて9  
はいないよ。」

人間になれ！

甲「たしかに間違つていたね。」

乙「だから社会を見よ。金持が歩いたり、貧乏人が歩いたり、校長やら、小便やらが動いていて、人間がないじゃないか。」

おい君、素裸な人間になれ。

人間が人間になる、君が君になるより重大なことはあり得ない。」

甲「言われる通りだ。俺には俺がいなかった。」

乙「人間のほんとうの喜びは、まず、自分が自分に帰る所から生れる。」

甲「どうすればいいのだ。」

乙「自己清算だ。君のはらわたは、複雑極まつている。たたき直して、もつと単純にするのだ。様々な網や鎖が限りなく君を内に縛っている。全部切りすてるのだ。」

甲「話を聞いていると、一本ずつとられる気がする。」

乙「君の心にさしこんで来る智慧の光が、闇を去らし、智慧の剣が、切除くのだ。次には是非無くてはならぬことは自己内省だ。現代人の悪傾向の一つは、この自己内省を棄てたことだ。本能的な野蛮人が、高度文明の中で、高等な衣食住の中で跳つているのだ。」

甲「僕もそれだった。僕は怒りぼくて、愚痴の多い人間だ。」

### 生きる情熱

乙「そりや君のような人間へつきものだ。僕は君を見てみると、三十にも足らないのに老人に見えたり、女に見えたり、幽霊に見えたり、時には、妙に高慢に見えたり……つまりどれが君かよくわからない。腹も立てるらしいが、それであつて熱くはない。何だか冷たい。一口にして言うと言つて情熱がない。情熱が。火が消えているのだ。そのくせ、人一倍の感傷主義者だ。情熱のない人の人生は淋しい！」

甲「どこにその原因があるのだろうか。」

乙「愚なんだよ。一口にして言えよ。人生、社会に対する認識がはつきりしていないのだ。その日過ぎなのだ。君の生活の底には、正しい論理がないのだ。本

当の情熱は、修養躍りの安価な涙や、感激からは生れない。その場を去れば、あとかたもなしだ。真の生きてゆく情熱は、正しい論理から生れるのだ。この点から言えよ、君は学ばないからいけないよ。学ぶということは学校に行かなければ出来ないと思つている。学校へ行けなかつたことに落胆して、今日ちつとも学ばない。大変な矛盾だね。おい君しつかりせんか。」

甲「いやはや、何と言葉の出しようがない。」

### 自己清算

乙「ブリキで作つた切物きれものなら紙くらいは切れる。刃はついていたつて駄目だ。ところが本部の薪を割つている斧を見たまへ、刃の方が一分も厚みがある。それでも大きな木が割れるぞ。重みが割るのだ。感情は刃だ。重さは智慧だ。深い智慧が、感情と一つになつた時、正しい意志が動くのだ。

人生に対する強い情熱はかくして生れるのだ。

情熱の火が燃えて来たら、何かは出来るさ。

君のように自分さえ見えていない人間には人生や社会は見えない。したがつて、社会的役割が与えられない。生きてることがつまらないはずだ。

霞の向うの方に描いた夢の世界が実現したら、一刻千金で生きようなんて考えている人間は死んだがました。

おい足もとを見よ。村を、農村を、日本を、世界を、二度とはないぞ。生甲斐を感じないか。それとも、あの向うの大金持の若さんのように、大学をすまして帰つて来て、ラジオと釣竿と音楽とスキーとで毎日遊んでいたいのか。徹底的に一切を清算せよ。」

甲「……………」